

第48回 シナリオS1グランプリ

部門②

「まじよ」はそっくにいた！

周南 カンナ

〔ましよ〕はそこにいた！・梗概）

一九四五年の広島。三笠章（24）は自身の病院で敵機観測をしていた。三笠がB29の下に人が飛んでいるのを見た瞬間、原爆が炸裂した。

三笠は市内の救護の後、人が飛んでいた地点に寄る。そこでましよ（20歳位）に出会う。ましよは警戒するも、衰弱していたので三笠は家に連れて帰る。

翌日、三笠はましよに看護婦として手伝ってほしいと提案する。献身的に働く姿を見たましよは、三笠の提案を受け入れる。三笠はましよが魔女だと思い観察する。

二か月後、三笠とましよは信頼できる関係になる。ある日、かかりつけの内野キミ（43）の家を訪ねると、幼馴染の内野えい子（24）がいた。えい子は三笠に好意を寄せていたが、鈍さにあきれ、長崎に嫁いでいた。

診察の帰り、えい子がましよに向かって金づちを投げつける。三笠がかばって額に怪我

を負う。

その日の夜、えい子は謝罪に行くも、三笠の額を見て逃げてしまう。三笠が鏡で確認すると額の怪我が消えている。三笠はましよが魔女だと確信する。

後日、三笠は進駐軍からましよを差し出せという命令を拒む。ましよを守るためだ。しかし、被爆者を救うためなら差し出すべきか三笠は悩み始める。

ある日、三笠とましよは駅でえい子の旦那を探すのを手伝う。しかし旦那は長崎で死亡していた。

三笠がえい子を励まそうとする時、ましよが進駐軍のジープに拉致される。三笠も慌ててジープに飛び乗る。ジープは蛇行を繰り返して、川に落ちる。三笠とましよは流され、行方不明に。

三笠は海で溺れていた。そこへましよがほうきに乗って助け、病院の屋上に降り立つ。

そこへえい子が現れる。えい子はましよが

魔女だと知り、彼女を食べれば原爆症が治ると信じる。あの日、えい子は広島で被爆したのだ。

しかし、ましよには実体が無かった。ましよは人間の考えで具現化されたもので、信じる人が薄れていけば消えると説明、今も消えつつあると三笠は悲観する。

そこへ再びましよは進駐軍に狙われる。三笠とえい子が必死に守ろうとするのを見たましよは、ほうきにまたがり力を振り絞り、三笠とえい子に乗せて空へ飛び立つ。三笠はましよが元気になったと喜ぶ。

しかし、直後にキミが急死する。それを見た三笠は原爆病と戦うため、ましよと決別する。

十年後、宇品港にましよの着ていたドレスとほうきがボロボロの状態で届く。水爆実験場付近で回収されたと聞いた三笠は、後世に彼女がいたことを伝えようと決意する。

(登場人物表)

三笠章 (24) (22) (34) 開業医

内野えい子 (22) (24) (34) 三笠の幼馴染

野高孝仁 (27) (25) (37) 憲兵隊員

内野キミ (43) えい子の母

檜橋市祐 (24) 三笠の大学同期生

兵隊

被爆女性

係員

被爆男性

憲兵

女性患者

女性A

女性B

女性C

女性D

進駐軍A

進駐軍B

ごろつきA

ごろつきB

船員A

船員B

ましよ（20歳位）  
20歳位に見える魔女。

○広島市・市内俯瞰（朝）

T「昭和二十年、あの日の広島」

眼下に産業奨励館や繁華街の中島本通りが見える。

相生橋には路面電車が見える。

○宇品港・外観（朝）

軍人や工員らが道に出る。

○三笠病院・外観（朝）

宇品港に面した二階建ての個人病院。  
外観は黒く塗られている。

○同・屋上・外（朝）

屋上で三笠章（24）が観測器で空を見ている。

野高の声「三笠君！」

三笠が観測器から目を離す。  
憲兵姿の野高孝仁（27）が三笠に近づく。

野高 「空襲警報が出たら壕に入らんか！」

三笠が笑う。

三笠 「解除になったじゃないですかあ」

野高 「あのなあ……」

三笠 「それに敵機観測は必要でしょう？」

三笠が再び観測器を覗き込む。

野高が三笠の足元にある冊子を拾う。

冊子の題名は「超常科学現象二関スル考察」の文字。

野高がため息をつく。

野高 「まだ、こんなのに凝ってるのか？」

三笠 「別にいいじゃないですかあ」

野高がページをめくる。

野高 「幽霊に、錬金術、未確認飛行体！」

野高があきれて冊子を閉じる。

三笠 「夢があるじゃないですかあ」

野高 「夢の前に戦局を変えてくれんか？」

三笠があきれて観測器から目を離す。

三笠 「夢は大事だと思いますが？」

三笠が観測器を再び覗き見る。



野高「……そんなんだから、えい子ちゃん」

三笠「何です？ えい子ちゃんが」

野高「……愛想、尽かしちゃったんじゃ？」

野高が冊子を放り投げる。

三笠「大発見は男のロマンですよ」

野高「（小声）黙ってりや、いい名士なのに」

野高があきれた顔で三笠を見る。

観測器を覗いている三笠の顔が疑問の表情になる。

三笠「野高大尉、上」

野高「何だ？」

三笠「なんか、飛んでませんか？」

野高が双眼鏡を取り出し空を確認する。

野高「一機飛んでるな」

野高が双眼鏡を外し腕時計を確認する。

野高「八時十四分、B29単機確認！」

三笠「いえ、その下です！」

野高が再び双眼鏡を覗く。

観測器を覗いていた三笠の目が大きくなる。

○野高の腕時計・外（朝）

国産の腕時計。

時刻が八時十五分を指す。

閃光が走り、真っ白になる。

○タイトル

白地に黒で『ましよ』はそこにいた！

○宇品港・港湾施設・外

横たわる三笠のほほを野高が叩く。

三笠が急に咳き込みだし、目を見開く。

三笠が体を起こし、辺りを見る。

見渡す限り炎と黒煙が見える。

三笠「一体、何が？」

野高「分からんが……何か爆発して」

野高が街の方角を見る。

野高「俺と君は海まで吹っ飛ばされた」

三笠「吹っ飛んだ！ 病院は？」

野高「建物は無事だ。中は滅茶苦茶だが」

兵隊の声「野高大尉！」

兵隊が野高に駆け寄る。

兵隊「本部より似島の部隊に消火命令下達！」

野高「分かった！ 加勢する」

兵隊「それと医療関係者にも似島から要請が」

野高「そうか」

野高が三笠を見る。

三笠の姿はない。

野高「お、おい！」

野高が辺りを見る。

○広島市内・投下後の描写

市内は炎で覆われている。

被爆者が当てもなく歩く。

川辺には負傷者が座ったり、ぼう然と

立ち尽くしたりする。

川には死体が流れている。

○相生橋・橋上・外

相生橋の橋上にある路面電車は骨組み  
しか残っていない。

そこへカバンを持った三笠が来る。  
三笠が一瞬、空を仰ぎ見る。  
空は黒煙で覆われる。  
三笠が骨組みだけの電車に駆け寄る。

○路面電車・車内

車内に入る三笠。  
三笠が目丸くする。  
車内には真黒く焦げた遺体が数体、横たわっている。  
中にはつり革が溶けたものを手にする遺体も見える。

○相生橋・橋上・外

車内から三笠が口元を押さえ、橋のたもとまで駆けて、吐く。  
そこへ全身やけどの女性が赤ん坊を抱えて三笠に近づく。

被爆女性「水、この子を……」

被爆女性が赤ん坊を差し出して、その

場にしゃがみこむ。

三笠が過呼吸になり、せき込む。

三笠が目をつぶり、息を整える。

三笠が被爆女性の腕や首で脈を取ろうとする。

真つ黒にやけどして脈が取れない。

三笠が赤ん坊を見ると、やはり真つ黒で脈は取れない。

被爆女性が動かなくなる。

三笠が合掌する。

三笠「ごめんなさい……」

三笠が立ち上がり、走り出す。

○紙屋町・大通り・外

被爆者らがうめき声をあげながら歩く。

その中を三笠が走る。

三笠が足を止め、百貨店の入口を見る。

百貨店はかろうじて建物が残っている。

○福屋百貨店・入口・外

入口に次々と被爆者が入る。

三笠が入口に近寄る。

破れた国民服の係員が出てくる。

係員「何だ？ 君は」

三笠「あ、え、宇品の病院の者です」

係員「医者か？ なら手伝え」

係員が中に入る。

三笠が恐る恐る覗き込む。

係員の声「早くしろ！」

三笠が慌てて中に入る。

○同・救護室・中

中は焼け残った建物の建材がむき出し  
になっている。

おびただしい数の被爆者が横になる。

うめき声や苦痛をあげる声がそこかし

こに聞こえる。

三笠が中に入る。

三笠が周辺の負傷者を見る。

三笠「ひどい……」

係員「早くしろ！」

係員が三笠を引っ張っていく。

奥の方の負傷者の列に係員が三笠を連れてくる。

係員「治療を！ 早く！」

三笠「薬は？ 包帯は？」

係員が黙って指をさす。

指さす場所には焼けたバケツなどが雑然と置かれる。

係員が足早に去る。

三笠が負傷者にしゃがみこんで、触診を始める。

○広島市内・道路・外（夕）

包帯を頭に巻いた警察官が、負傷者の聞き取りをする。

警察官が書類に記載をする。

別の警察官が負傷者を誘導する。

○福屋百貨店・救護室・中（夕）

三笠が列の最後尾の負傷者を診終える。  
三笠が立ち上がり、その場を離れようとする。

三笠「応援を頼もう」

係員が三笠の腕をつかむ。

係員「隣の部屋も頼む」

三笠「救護、救援はまだですか？」

係員が三笠の胸ぐらをつかむ。

係員「あんな状況であてにできるか！」

係員が立ち去る。

三笠が救護所の入口を見る。

被爆者が列をなしてやって来る。

列は途切れない。

三笠が息苦しく目をつぶる。

悲鳴やうめき声が聞こえる。

三笠が耳をふさぎ隣の部屋に駆け出す。

○広島市内・俯瞰（朝）

廃墟となった広島。

ところどころに鉄筋の建物が残る。



いくつか白煙や黒煙が見える。

○福屋百貨店・入口・外（朝）

中から担架で死亡者が運ばれ、前に止まっている馬車の荷台に乗せていく。

野高がやってきて中に入る。

○同・救護室・中（朝）

隅の方で三笠が眠っている。

野高が三笠を見つけ近づく。

野高が三笠のほほを数回叩く。

三笠がうつすら目を開ける。

野高が小さく安どのため息をつく。

野高「心配したぞ……」

三笠が目を覚ます。

野高「まさか市内へ行ってたなんて」

三笠「……すいません」

三笠がゆっくり起き上がる。

野高「お前も医者なんだな……」

三笠「何です？」

野高「いや、いつもガキくさいと思ってたら」

野高が救護所内を見る。

野高「ここで活動していたとは……」

三笠「別に使命感ってわけでは」

野高「ちよつと見直したよ」

三笠「ところで、今日は何日ですか？」

野高「八月十日だが、どうした？」

三笠「いえ、ずっとここで寝ずにやってまし

たから」

野高「そうか……頑張ったな」

三笠「さて……」

三笠が救護所内を見渡す。

中はガランとしている。

三笠が首を傾げる。

三笠「あれ？ もっといたはず」

野高「ここでの活動は終わりだ」

三笠「負傷者はどこに？」

野高「陸軍病院や市外の学校に移った」

三笠「それでもあんなにたくさんを収容でき

ますか？」

野高が寂しげな顔をする。

野高「ほとんどは茶毘に付された」

三笠「そうですか……」

野高「お前、一旦家に帰れ」

三笠「え？」

野高「休め！ 長丁場になるかもしれん」

三笠「……あの、何があつたんです？」

野高が三笠の耳元に近づく。

野高「収容先で変死が相次いでいる」

三笠が驚いた顔をする。

三笠「あれは細菌兵器じゃないですよ」

野高「分かつとる。それにな……」

三笠「何です？」

野高「軍から市民に職場復帰せよと」

三笠があきれた顔をする。

野高「戦争継続だそうだ」

三笠「まだやる気なんです？」

野高「全く、長崎にも落ちたって言うのにな」

三笠「あ、ところであの爆弾は一体？」

野高「……原子爆弾って専門家が言ってた」

三笠の表情が凍り付く。

野高「お前がそんな顔するなんて……」

野高が驚いた後、暗い顔になる。

三笠「……分かりました。一旦、帰ります」

野高がうなづく。

野高「俺は市内の警備に回る」

三笠がカバンを持って野高に一礼する。

三笠「……では」

三笠が足早に立ち去る。

○相生橋・外観（朝）

橋上にあつた路面電車は無い。

○同・橋上・外（朝）

三笠が力なくやってくる。

三笠が空を仰ぎ見る。

○（フラッシュ）空（朝）

B29の下をほうきで飛ぶ人影。

○元の相生橋・橋上・外（朝）

三笠が空を見上げる。

三笠「……あの子、確かに飛んでいた」

すすり泣く声が聞こえる。

三笠が辺りを見渡す。

三笠が橋の下をのぞく。

三笠が驚いて橋のたもとから橋下に降りる。

○同・橋の下・外（朝）

橋の下に降りた三笠が思わず声をあげようとして、慌てて口に手を当てる。

髪を後ろで結んだましよ（20歳位）が立っている。

ましよは破れた黒のドレスを着ている。

三笠「生きてる！」

ましよが三笠に気づく。

三笠がぎこちない笑顔でましよに手で挨拶する。

ましよが三笠をきつく睨む。

三笠がゆっくりましよに近づく。

ましよが慌てて石を拾い三笠に投げる。

三笠のおでこに石が命中し、三笠が変な声をあげてうずくまる。

ましよが一瞬、気まずい顔をするがすぐに踵を返す。

三笠「あ、ちよつと！」

三笠が後を追おうとする。

被爆男性の声「水……」

三笠が振り返ると、憔悴しきった若い

夫婦が川の水を飲もうとする。

三笠が川を見る。

川には死体やがれき、油が見える。

三笠が夫婦に駆け寄る。

三笠「止めなさい！」

夫婦が川の水を飲んでしまう。

夫婦が激しくせき込み、水を吐く。

三笠が夫婦の背中をさする。

振り返るとましよの姿はない。

○三笠病院・外観（夜）

○同・一階・診察室・中（夜）

中の棚のガラスはすべて割れている。  
床にはガラス片や材木などが散乱する。  
机の上にはランタンが灯っている。  
三笠がほうきを使って掃除をする。  
三笠が手を止める。

三笠「……原子爆弾」

三笠がほうきを手放し、外に出る。

○相生橋・外観（夜）

○同・橋のたもと・外（夜）

三笠がカバンを持ってやってくる。  
三笠が橋の下を覗き込む。  
三笠がゆっくり橋の下に向けて歩く。

○同・橋の下・外（夜）

橋の下に人気は無い。

三笠が小さくため息をつく。

三笠が踵を返そうとする。

小さな咳が聞こえる。

三笠が慌てて振り返り、目を凝らす。

再び咳が聞こえる。

三笠が咳の聞こえる方へ静かに歩く。

三笠の右横で咳が聞こえる。

三笠が右下を見ると、顔面蒼白のましよを見つける。

三笠が驚いてましよにしゃがみこむ。

三笠がましよのほほを小さく叩く。

ましよが三笠を見る。

ましよが慌てて逃げようとするが、すぐに動かなくなる。

三笠がましよのおでこや脈を診る。

三笠が驚いた顔をしてましよを抱える。

三笠「軽い！ この子は……」

三笠が駆け出す。

○三笠病院・外観（朝）



○同・二階・居間・中（朝）

布団にましよが眠る。

ましよがうっすら目を覚ます。

階下からガラス片を片付ける音がする。

ましよが体を起こそうとする。

ましよが気づいて自分の姿を確認する。

ボロボロの黒のドレスで安どする。

ましよが起きて階下に向かう。

○同・一階・診察室・中（朝）

三笠がカッターシャツに白衣を羽織る。

三笠が鉄のバケツにガラス片を入れる。

階段の音に気づき、振り返る。

三笠が優しく微笑む。

三笠「えっと、おはよう」

ましよが三笠を睨む。

三笠「な、何もしてないよ……」

三笠が引きつった笑顔なまま、ましよに近づく。

ましよが床に落ちていた木片をつかむ。

三笠がさらに近づく。

ましよが嫌がって木片をデタラメに振り回す。

三笠が避けようとして転ぶ。

転んだはずみでガラス片を入れたバケツに三笠の右腕が突っ込む。

三笠が苦痛の表情になる。

ましよの動きが一瞬止まる。

ましよが三笠の右腕を見る。

三笠も右腕を見ると、出血している。

三笠「いてて！」

三笠が飛び起きて外に出る。

### ○同・洗濯場・外（朝）

洗濯場に水をためたバケツがある。

三笠が急いでやってきて白衣を脱ぎ、

シャツの腕をまくり、傷の部分を洗う。

三笠「いってー！」

三笠がバケツをよく見ると真っ黒の水。

三笠が振り返ると、建物の端からまし

よが覗き見る。

ましよが気まずそうに顔を引っ込める。

三笠が傷を洗っていると、足音がする。

三笠がむっとして振り返る。

三笠「何だい！」

一人の兵隊が立つ。

三笠が慌てて立ち上がり、一礼する。

兵隊「すみません」

三笠「いえ、どうされましたか？」

兵隊「軽傷者の治療をお願いしたい」

三笠「軽傷者？ 何で？」

兵隊「司令部より戦争継続のため」

三笠があきれて手で発言を制す。

三笠「分かりました……重傷者は？」

兵隊「似島の検疫所の方に移します」

三笠が白衣を羽織り兵隊らと歩く。

○同・一階・診察室・中（朝）

軽度熱傷の患者や、外見では被爆者と分らない患者が並ぶ。

聴診器を動かしたり、カルテを書いたりする度に、三笠が痛みの表情になる。物陰からましょが三笠を見たり引っ込んだりする。

○宇品港・港湾・外（夕）

粗末な船がポンポンとエンジン音を立てる。  
重傷者をいっぱい乗せて船が出港する。  
対岸には似島が見える。

○三笠病院・外観（夕）

○同・一階・診察室・中（夕）

三笠が女性患者に左手で軽度熱傷の部位に消毒する。  
女性患者が痛がる顔をする。

三笠「ごめんなさい」

女性患者「いえ……助かりました」

三笠が消毒を終える。

三笠「はい、もう大丈夫ですよ」

女性患者が浮かない顔をする。

三笠「どうされましたか？」

女性患者「あの爆弾って、何なんです？」

女性患者が辺りをうかがってから三笠に近づく。

女性患者「目に見える傷だけじゃない」

女性患者がさらに三笠の眼前に近づく。

女性患者「あれで気が狂った人も見ました」

三笠「そ、その……」

女性患者「医者から見てあれは何ですか？」

三笠「……大本営の発表の通りの爆弾だと」

女性患者「……私はそうは思いません」

三笠「では、あなたは何だと考えますか？」

女性患者「……心を壊すもの」

三笠「……他の兵器もそうだと思いますが？」

女性患者が小さくかぶりを振る。

女性患者「……そして、この土地をずっと蝕

むもの」

女性おもむろに立って診察室を出る。

三笠が出入口の方を見てため息をつく。  
三笠「次の方！」

人が来る気配はない。

三笠が立ち上がる。

三笠が苦し気に出入口の方に向かう。

○同・玄関・中（夕）

三笠が息苦しそうにやってくる。

玄関には誰もいない。

三笠「苦し気に」お、おわった……」

三笠がその場にへたり込む。

三笠が目をつぶる。

後ろから足音が聞こえる。

三笠「体が……軽い？」

三笠が気を失う。

○（三笠の夢） 広島駅・ホーム・外

ホームにはSL列車が止まる。

ホームに内野えい子（22）が立つ。

三笠（22）や野高（25）が見送りに来

ている。

野高は号泣している。

三笠がえい子に近づく。

三笠「結婚、おめでとう」

えい子がそつぽを向く。

三笠「旦那さん、長崎工廠のいい人そうだね！」

えい子がそつぽを向いたまま、三笠の足を踏む。

三笠「いった！」

えい子の踏む足が強くなる。

三笠「何だよ！」

えい子が三笠に向く。

えい子は泣き顔で口を「イーだ！」とする。

えい子が客車に乗り込む。

列車が走り出す。

ホームで笑顔で見送る人の中、三笠が

浮かない顔をする。

辺りが暗くなっていく。

三笠の声「何で泣いてるの？」

○元の三笠病院・二階・居間・中（朝）

三笠（24）が布団に眠る。

ましよ（20歳位）がその傍らで三笠の手を握る。

三笠が目を覚ますが寝ぼけ眼。

三笠「えい子ちゃん……」

ましよが不機嫌な顔になり、握っている手をつねる。

三笠「いてて！」

三笠が驚いて起き上がる。

三笠がましよと目が合う。

三笠「あ……」

ましよが三笠の右腕を見せ示す。

三笠の腕には包帯が正しく巻かれている。

三笠がいろんな角度からその部分を見る。

三笠が感心した顔になる。

三笠「……見事だ」

ましよが自信満々な顔をする。



三笠「ありがとう」

三笠が頭を下げる。

ましよがまんざらではない顔をする。

三笠「そういえば、君、話せない？」

ましよが困った顔をする。

三笠「ちよつと、口を開けてくれる」

ましよが戸惑うも、ゆっくり口を開ける。

三笠がましよの両ほほに手を乗せる。

ましよが一瞬、体を震わせる。

三笠「ごめんね、ちよつと見させてね」

ましよが目をつぶる。

三笠がましよの口内を覗き見る。

三笠がましよの両ほほから手を離す。

三笠「特に何か悪いってわけではないか……」

三笠が辺りを見渡す。

三笠「えーっと、字は書ける？」

三笠が部屋の隅ある布カバンを見る。

三笠が布カバンに近づき、中を漁る。

三笠がノートと鉛筆を持ってくる。

ましよがノートと鉛筆を受け取り、書き出す。

ノートには「このまえはごめんなさい」の文字。

それを見た三笠が笑う。

三笠「いいよ、怖かったでしょ？」

ましよが小さくうなづく。

三笠「ところで、看護婦の経験ってある」

ましよが返答に困った顔をする。

三笠「いやさ、この包帯の部分」

三笠が右腕を見せる。

三笠「手慣れてないとできないし」

ましよが照れる。

三笠「それに右腕が少し痛むんだ」

ましよが申し訳なさそうな顔をする。

三笠「難しいのはもちろん僕がやる。だから」

ましよが困った笑顔でうなづく。

三笠「いいの？ ほんと？」

ましよがノートに書いて見せる。

「ひとりぼっちですから」の文字。

ましよが一礼する。

三笠が笑う。

三笠「そっか、それじゃ名前教えて」

ましよが虚を突かれた顔をする。

ましよが腕を組んで悩む。

三笠「魔女さん？」

ましよが顔を真っ赤にしてかぶりを振る。

三笠「嘘だよ……ましよさんかな？」

ましよが手を打ってうなづく。

三笠「じゃあ届け出してくから」

三笠が右手を差し出す。

三笠「長丁場になるけど、よろしくね」

ましよがおおぞと握手する。

三笠が痛がる顔になる。

ましよが手を離し三笠の右腕をさする。

三笠がましよを見て、顔を赤らめる。

○宇品港・外観（夜）

船は一隻も停泊していない。

○三笠病院・外観（夜）

○同・一階・診察室・中（夜）

診察室の机にランタンを置いて三笠が  
ペンを持つ。

三笠「観察が必要、本物であれば大発見……」

三笠が書こうとして手が止まる。

三笠が迷う表情になるが、すぐにかぶ  
りを振る。

三笠「（小声）ロマンある大発見……」

三笠が痛がりながらも書き出す。

三笠の声「僕は少なくとも被爆したはずだ」

三笠が頭を軽く抱え、筆を進める。

三笠の声「でもまじよは無事だった！」

三笠が見上げる。

○同・二階・居間・中（夜）

布団にまじよが眠る。

三笠の声「きつと、みんなの励みになる！」

○ニュース映像

「終戦の御詔勅！」のテロップ。

ポツダム宣言受諾のニュース映像。

皇居に向かって正座して泣き崩れる人々が映る。

続いて「降伏文書調印」のテロップ。

戦艦ミズーリ号の艦上にてマッカーサ

ー元帥が演説する。

その後、重光葵が文書に調印していく。

○広島市内・スケッチ

川沿いにバラックの原爆スラムが形成されつつある。

広島駅前の闇市は人々でごった返す。

道路では進駐軍らが原爆被害を眺めたり、カメラを構えてシャッターを切る。

○三笠病院・外観

ラジオから「リンゴの唄」が流れる。

○同・一階・診察室・中

三笠がカバンに聴診器などを入れる。

三笠「ましよさん！」

三笠がカバンを閉じる。

三笠が出入口を振り返る。

三笠「ましよさん？」

三笠がカバンを持って玄関に向かう。

階上から物音が聞こえる。

三笠が階段をのぼる。

○同・二階・居間・中

モンペ姿のましよが冊子を読んでいる。

三笠が来たがましよは気付かない。

三笠「ましよさん」

ましよが慌てて冊子を後ろに隠す。

三笠が笑う。

三笠「何見てたの？」

ましよがとぼけた顔をしてそっぽを向く。

三笠もわざとらしくとぼけた顔をして

本棚を見る。

本棚には「未知ナル世界」や「超常現象」などオカルトじみた背表紙が並ぶ。別の大判の背表紙には「人類、太陽ヲ作ル」の背表紙。

三笠「ああ！ 僕の大事な本が無い！」

三笠が大きさに悲しい顔をする。

ましよが慌てて後ろに隠した本を出す。

本には「魔女ニ関スル一考察」の題字。

三笠がましよに微笑む。

ましよがむくれる。

三笠「勉強熱心だね」

ましよがノートを取り出し書く。

ノートに「魔女がお好きなんですか？」

ましよが少し警戒する表情をする。

三笠が微笑む。

三笠「歩きながら話そう、ほら行くよ！」

三笠が階段を降りていく。

ましよが慌ててついていく。

○宇品通り・外観

荷物を載せた馬車やジープが走る。

三笠の声「小さい時、二つ目の大戦争の前」

○同・海岸沿いの街路

未整備な街路でがれきの山がほつたら  
かしの状態。

海岸沿いを三笠とましよが並んで歩く。

三笠「僕は体が弱くて寝たつきり」

ましよが三笠の表情を見ながら歩く。

三笠「それで親父らが本を持ってきてね」

三笠とましよが並んで歩く。

○皆実町通り・外

宇品通りより幅が広い通り。

未整理でがれきの山がそこかしこに見  
える。

三笠とましよがガレキを避けながら歩  
く。

三笠「おとぎ話、錬金術、超常現象」



三笠の楽しげな顔。

三笠「わくわくしたなあ!」

ましよが笑顔で三笠を見る。

三笠「幼馴染のえい子ちゃんも持ってきたな」

ましよがむくれる。

三笠「魔法使いの本とか!」

ましよが一瞬、体を跳ねらせる。

三笠が笑う。

三笠「どうしたの?」

ましよがかぶりを振る。

ましよがずんずん歩く。

三笠「こらこら、ましよさん!」

ましよが足を止め、振り返る。

三笠「あっちの橋、渡るんだよ」

ましよが顔を赤くして三笠と共に橋を

渡る。

### ○原爆スラム・外観

粗末なバラック造りの家々が並ぶ。

○同・通り・外

三笠とましよが歩く。

通りにはスラムに住む女性たちが井戸  
端会議をする。

女性A「ピカで死んだ人の骨が効くのかねえ」

女性B「うちはお灸が効くって買ったわ」

女性C「でも、新聞にはピカのこと何も」

女性D「書いてないわ……なんだか怖い」

女性らが三笠とましよを見る。

女性A「こんにちは」

三笠「どうも……」

女性C「内野さんとここに行くの？」

三笠「ええ、では」

三笠が会釈して、ましよと共にその場  
を離れる。

女性らが顔を突き合わす。

女性C「今の三笠先生よね」

女性B「綺麗な看護婦さんだわ。あれ、でも」

女性D「内野さんの娘とはどうなったの？」

女性らが三笠とましよの後ろ姿を見る。

女性ら「何も無ければいいけど」

女性らが興味津々で顔を見合わせる。

○内野家のバラック・外観

隣接するバラックと同様に粗末な家。

屋根では内野えい子（24）が金づちで打ちつける。

○同・入口・外

三笠とましよがやってくる。

三笠「こんにちは」

三笠とましよが中に入る。

○同・居間・中

布団で横になっていた内野キミ（43）が起き上がる。

キミ「こんにちは」

三笠とましよがキミの傍らに座る。

三笠がカバンを開け、聴診器などを取り出す。

三笠「前の時からどうです?」

キミ「相変わらずですね」

三笠「そうですか……」

金づちを打ちつける音が大きくなり、  
やがて止まる。

三笠が一瞬、屋根を見上げる。

三笠「そういえば、誰かいるんです?」

キミ「あら、言わなかったっけ」

三笠が首を傾げる。

キミ「えい子、帰ってきたんだよ」

三笠が驚いた顔をする。

キミ「あの子、長崎にいたでしょ、だからね」

キミが悲しげな顔をする。

キミ「何も言わないんだけどね……」

三笠「えい子ちゃん、爆弾が落ちた日は?」

キミ「さあ、特に何も言っていないけど」

三笠「そうですか……それじゃ診ますね」

ましよがキミの腕に装置を巻く。

○同・玄関・外(夕)

三笠とましよが出てきて中に振り返る。

三笠「それじゃ、また」

三笠とましよがお辞儀する。

えい子が金づちを持って屋根から降りてきて、三笠とましよを見る。

三笠がぎこちない笑顔で手を上げる。

三笠「や、やあ……」

えい子がましよを一べつする。

えい子が怒りの形相で金づちをましよに向けて投げる。

三笠が慌ててましよをかばい、三笠の額に金づちが命中する。

三笠がうめき声をあげてその場にうずくまる。

えい子が一瞬、我に返る。

ましよが三笠の頭を見る。

三笠の額から出血している。

三笠「……大丈夫だよ、行こう」

三笠が立ち上がり、額を押さえる。

ましよがえい子を睨みつける。

えい子が一瞬、ひるむ。

えい子がましよを睨み返す。

三笠とましよが歩き出す。

えい子が落ちていた金づちを拾い、屋根に上る。

えい子が荒々しく金づちを打ちつける。

### ○三笠病院・外観（夜）

### ○同・一階・診察室・中（夜）

診察室には電灯がついている。

ましよが三笠の額のけがの部分に手を当てる。

ましよが目を閉じ、集中する。

三笠も目を閉じる。

ましよが小さくため息をついて、三笠の額から手を離す。

三笠が目を開ける。

ましよが絆創膏を三笠の額に貼る。

三笠「ありがと……でも、何をしたの？」

ましよが口を「おまじない」と動かす。

三笠がほほ笑む。

三笠「だいぶ表情が軟らんできたね」

ましよがほほ笑んでうなづく。

三笠「でも、えい子ちゃん、どうして……」

ましよが急にむくれる。

三笠「……ましよに金づちを投げたのかな？」

ましよが少しあきれて診察室を出る。

三笠が小さくため息をつく。

三笠「……さてと」

三笠が階段を見て、人がいないか確認する。

三笠が電灯を消す。

三笠が机に近づき、ランタンを灯す。

三笠が机から古びた手提げ金庫を取り出す。

三笠が右腕を動かすたびに痛がる顔をする。

三笠が手提げ金庫に操作して開ける。

中からノートを取り出し、金庫を脇に

片す。

ノートを開き、三笠が書き込んでいく。

○宇品通り・外(夜)

カッターシャツにズボン姿の野高(27)  
がえい子と並んで歩く。

えい子の手にはキャラメルの箱が握ら  
れる。

えい子「あいつの家に付き合ってもらってす  
いません」

野高が手を振る。

野高「いやいや、えい子ちゃんの頼みなら」

えい子「(笑い)ありがとうございます」

野高「全く、三笠の奴は」

えい子「……何です?」

野高「えい子ちゃんがいるって言うのに!」

えい子がかぶりを振る。

えい子「あいつは魔法やお化けの虜ですから」

あきれた表情で野高が頭をかく。

野高「ってことは、三笠の横にいる子は」



えい子「魔女ですか？」

えい子がむくれた顔になる。

野高「でもよ、あの三笠に女だぞ！」

えい子「……あの看護婦って一体？」

野高「さあ、妙にはぐらかすんだよ」

えい子が持つているキラメルの箱を  
思わず強く握り、変形させてしまう。

○三笠病院・玄関・外（夜）

えい子と野高がやって来る。

えい子が戸から中をうかがう。

えい子が笑って玄関の取っ手に手をか  
け押す。

戸が開く。

野高が手で「行け」と仕草する。

野高「俺は待っとくよ」

えい子が戸をさらに押す。

えい子「おい、入るよ」

えい子が中に入っていく。

○同・一階・診察室・中（夜）

恐る恐るえい子が中に入る。

三笠が机のノートに突っ伏して眠る。

えい子「まったく……」

えい子が三笠に近づく。

えい子が三笠のノートを覗き見る。

三笠の頭がノートにかぶさって見えな  
い。

えい子「しょうがないねえ……」

三笠が眠ったまま、左に傾ぐ。

三笠の額に貼ってある絆創膏をはがれ  
そうになる。

えい子がいたずらな笑顔になり、三笠  
の額の絆創膏に手を伸ばす。

えい子（小声）「せーの」

えい子が三笠の絆創膏をつかむ。

えい子「えい！」

えい子が三笠の絆創膏をはがす。

三笠が驚いて目を開ける。

えい子「えっ！」

三笠の額には傷跡一つない。

えい子「え？ え？」

三笠が困惑した顔になる。

三笠「えっと、えーっと」

えい子「あ、あ！」

えい子がキラメルを慌てて落として  
診察室を出る。

○同・玄関・外（夜）

野高がタバコを吸っている。

えい子が野高にぶつかって走り去る。

野高「お、おい！」

野高が加えていたタバコを捨て、えい  
子を追う。

○同・一階・診察室・中（夜）

三笠が数回まばたきをして、辺りをう  
かがう。

三笠が首を傾げて床を見ると、ひしや  
げたキラメル箱が見える。

三笠が左手でひろう。

三笠が不思議そうに首を傾げる。

三笠が額に手を当てる。

三笠が診察カバンに近づき、鏡を取り出し、自身の顔を見る。

額の傷が一つもない状態に気づく。

三笠が階上を見る。

○同・二階・居間・中（夜）

布団の中でまじよが寝息を立てて寝る。

○広島市内・俯瞰（朝）

朝日が街を照らし出す。

○三笠病院・外観（朝）

○同・洗濯場・外（朝）

病院の壁に一本のほうきが立てかけられている。

モンペを着たまじよがほうきを眺める。

ましよが辺りを見渡して、ゆっくりほうきに手を伸ばす。

ましよがほうきをつかみ、いろいろな角度からそれを見る。

ましよがほうきの重さを確認して、またがろうと足を上げる。

三笠の声「ましよさん」

ましよが飛び上がり、慌ててその場をほうきではく。

三笠が笑いながらやって来る。

三笠「おはよう」

ましよが一礼する。

三笠「何してたの？」

ましよが顔を赤らめて、そっぽを向く。

三笠「ひよつとして、飛ぼうとしたりして」

ましよが一瞬、驚いた顔をする。

ましよがおもむろにほうきにまたがる。

三笠が興味あるような顔でそれを見る。

ましよが目を閉じ、両足で地面を蹴る。

ましよの体はすぐに地面に落ちる。

ましよが頭をかきながら立ち上がる。

三笠「(笑い) 分かった……ところで」

三笠がましよのモンペ姿を見る。

三笠「洋装が準備できたから、着るかい？」

ましよが明るい顔をしてうなづく。

三笠「二階にあるからね」

ましよが駆け出す。

三笠「黒いのはお針子さんに頼んだからね」

三笠が笑いながら見送る。

三笠がほうきに振り返る。

○宇品通り・外

一台の進駐軍のジープが走る。

○三笠病院・外観

ジープの走ってくる音が聞こえる。

○同・玄関・外

玄関先にジープが止まり、二人の進駐軍が降りる。

進駐軍らが中をうかがい見る。

進駐軍A「ヘーイ！」

机のキャビネットの音が聞こえる。

中から三笠が現れる。

○同・一階・診察室・中（朝）

三笠がイスに座っている。

進駐軍二人が立っている。

三笠「つまり被爆者調査のため協力しろと？」

進駐軍BがAに訳し、AがBに話す。

進駐軍B「はい」

三笠「なら、日赤や陸軍病院にあたるべきで」

三笠が診察室を見渡す。

三笠「ここには資料はありません」

三笠が進駐軍らを見る。

三笠「あなた方が望むような資料はね」

進駐軍AとBがやりとりする。

進駐軍B「私達が欲しいのはあなたの助手」

三笠「助手？」

進駐軍B「あなたの助手、怪我一つない」

三笠が困惑した顔になる。

三笠「そ、それは市外から来たわけで」

進駐軍Bがかぶりを振る。

進駐軍B「あの日、彼女を見た人がいる」

三笠「……ありません」

進駐軍B「なぜです？」

三笠「もし、あの地にいたら即死か重傷」

三笠が不敵な笑みを浮かべる

三笠「それはあなたの方がご存じでは？」

進駐軍Bが苦虫をつぶした顔をする。

進駐軍AとBがやりとりをする。

そこへ洋装に着替えたましよがやってくる。

進駐軍Aがましよを見て、思わず口笛を吹く。

進駐軍Bがましよを凝視する。

ましよがおずおずとお辞儀する。

進駐軍Bがいきなりましよの右腕をつかむ。

ましよが思わず腕を引っ込めようと抵



抗する。

三笠「ちよつと！」

三笠が慌てて立ち上がり、進駐軍Bから無理やり手を離す。

進駐軍B「……また来ます」

進駐軍らが不満げな顔で去ろうとする。おもむろに進駐軍Bが振り返る。

進駐軍B「そうそう」

進駐軍Bがましよを見る。

進駐軍B「行方不明の事件が起きてますよ」

進駐軍らが去っていく。

三笠「……心得ておきます」

ましよが診察室を駆け出て、枡を持って慌てて外に出ようとする。

三笠「待って！ 待って！」

三笠も慌ててましよの後を追う。

○同・玄関・外

進駐軍らが乗ったジープが走り去る。

ましよがやってきて、持っていた枡の

中をつかんでまこうとする。

三笠が慌ててやってきて、ましよを羽交い絞めする。

三笠「ダメ！ ダメ！ ダメ！」

ましよが不満タラタラで振り返る。

ましよの手には塩が握られる。

三笠「高いの！ ホントに高いの！」

ましよがむくれたまま柵を三笠に渡し、中へ入る。

三笠が申し訳ない程度に塩をまく。

○同・屋上・外

快晴の空。

ましよがやってくる。

いい天気、ましよが笑顔になる。

三笠の声「ごめんよー」

三笠がやってくる。

ましよがジト目で三笠を見る。

三笠がポケットを漁る。

三笠「だからお詫びに……ん！」

三笠がポケットからキャラメル箱を取り出す。

ましよの表情が一転して笑顔になり、三笠に近づく。

○青空

雲一つない快晴。

三笠の声「いい天気だね……」

○三笠病院・屋上・外

三笠とましよが体操座りで空を見る。

ましよがキャラメルを飲み込む。

ましよが三笠の手にあるキャラメル箱を見る。

三笠がそれに気づき、箱からキャラメルを取り出す。

三笠「いいよ」

三笠がキャラメルを箱から一粒出す。

三笠「ここのお礼」

三笠が自身の額を指さす。

ましよが一瞬戸惑う。

三笠が笑顔でキャラメルを差し出す。

ましよがおずおずとそれを受け取る。

ましよがキャラメルをほおぼる。

三笠が再び空を見る。

三笠「これは独り言」

ましよが怪訝な顔で三笠を見る。

三笠「あの日からこの街は変わっちゃった」

三笠が小さくため息をつく。

三笠「もはや違う街……そして人」

三笠が寂しげに笑い、空を見続ける。

三笠「噂じゃ75年、草木が生えないとか」

ましよが驚いた顔をする。

三笠「噂だよ……でも噂に人はおびえてる」

ましよがため息をつく。

三笠「でも、あの日を生き残った人々を」

三笠がましよを見る。

三笠「助けることができるか……」

ましよも視線をそらさず三笠を見る。

三笠「その力で助けることができれば……」

ましよが思わず視線を逸らす。

三笠「……なんてね、ごめん。独り言」

三笠がキャラメルを箱ごとましよに差し出す。

三笠「気にしないで……」

ましよが手を伸ばしかけて、かぶりを振って箱を三笠に押し返す。

不意に三笠がましよに倒れ掛かる。

ましよが慌てて三笠を受け止める。

三笠の息が弱い。

檜橋の声「おーい！ いるか！」

ましよが慌てて屋上を出る。

ましよが檜橋市屋（24）を引っ張ってくる。

檜橋が横たわる三笠に気づく。

檜橋「三笠！ 大丈夫か？」

檜橋が三笠を抱きかかえる。

檜橋「布団と、冷たい水を頼む！」

ましよがうなずき屋上を出る。

○同・二階・居間・中（夕）

布団に横たわる三笠。

三笠の傍らで檜橋が様子を見る。

ましよが檜橋の後ろで不安げに見る。

三笠「悪いな……ちよつと疲れただけだよ」

檜橋「大丈夫か？ 何か欲しいのあるか？」

三笠「喉が渴いたな、甘いモン、無いか？」

檜橋がましよを見る。

檜橋「サイダーが下にあるんで、いいですか？」

ましよがうなずいて居間を出る。

三笠が起き上がる。

檜橋「無理するなよ」

三笠「大丈夫だよ……んで檜橋、なぜここに？」

檜橋「ピカの調査団として来たんだ」

檜橋が廊下を見る。

ましよがサイダーとグラスを二つ持つ

てくる。

ましよがサイダーをついでいく。

檜橋が三笠の頭を小突く。

檜橋「何だい！ いつの間に嫁とったんだ！」

ましよが照れくさそうに部屋を出る。

檜橋「九大一の朴念仁が！」

檜橋が笑いながら、サイダーを飲む。

檜橋が表情を引き締める。

檜橋「ところで、お前、あの日いたんだな？」

三笠「あの日って、ピカドンの日か？」

檜橋がうなずき、カバンから地図を取り出す。

檜橋「……市内か？」

三笠がうなずく。

檜橋「……変なこと聞いていいか？」

三笠「何だ？」

檜橋「……魔女を見んかったか？」

三笠の表情が一瞬こわばる。

三笠「な、何だよ、急に」

檜橋がカバンからメモ書きを取り出す。

檜橋がメモを三笠に渡す。

檜橋「あの上空で見たと言ってるんだ」

三笠がそれを見る。

檜橋「あれを落とした搭乗員が見たと」

三笠が無言で檜橋にメモを突き返す。

三笠「ばかばかしい！」

檜橋「……悪かったよ、そんなに怒るな」

檜橋がメモをカバンにしまう。

檜橋「……なんか、変わったな」

三笠「何がさ？」

檜橋が本棚をあごで示す。

檜橋「大学生のお前なら、身を乗り出したよ」

三笠「ピカの後じゃあね……」

三笠がそっぽを向く。

檜橋「分かっているとと思うが、お前の体は」

三笠「知ってるよ！ 被爆してるんだ！」

檜橋が小さくため息をつく。

檜橋「……米軍はこの話に探りを入れている」

三笠「なんのためにさ？」

檜橋「治療のため……もし有効なら」

三笠が檜橋を見る。

檜橋「広島、長崎を救えるぜ……」

三笠「暇なんだな、米軍は……帰ってくれ」

檜橋が小さくため息をついて立つ。



檜橋「あと、哲学の黒崎教授、覚えてるか？」

三笠「ああ、オカルトな授業で覚えてるよ」

檜橋「……死んだよ、自殺だって」

三笠が驚いて目を丸くする。

三笠「どうして？ 教授に戻ったんだろ？」

檜橋「……人間があれ作っちゃまったからだ」と

檜橋があごで窓の外の太陽を指す。

檜橋「そのうち、別の太陽系も作れるだろう」

三笠「……人間が神様になるつもりなら」

檜橋がうなづく。

檜橋「もう、魔法や神様は用済みだろうって」

檜橋が手を上げて去っていく。

三笠が呆然と見送る。

### ○ABCC資料映像

米国の研究団体が病院で被爆者を調査する映像。

三笠の声「アメリカ・ABCCによる調査が始まった」

○三笠病院・一階・診察室・中(夜)

机に向かって三笠がノートに書く。

三笠の声「彼らの研究の目的は分からない」

三笠の筆が止まり、宙を見る。

三笠が再び筆を進める。

三笠の声「檜橋の言う通り、原爆症を治すためなら」

三笠が筆を止める。

三笠の声「ましよを引き渡すのは筋だ……」

三笠が見上げる。

○同・二階・居間・中(夜)

ましよが布団に眠っている。

三笠の声「でも……それが正しいのか？」

○原爆スラム・全景

雷鳴が近づく。

○同・通り・外

傘を持った三笠とましよが歩く。

三笠とましよが歩みを止める。

三笠がとある家の中を見る。

えい子の声「……死んだよ」

三笠が慌てて振り返る。

えい子が立っている。

えい子「ある日、血を吐いて死んだ」

三笠「えっ。でもABCCに行ってたんじゃない？」

えい子「さあ、調べただけなんじゃない？」

三笠「……なんで僕に連絡しなかったの？」

えい子「……連絡したら助かった？」

三笠が言葉に詰まる。

えい子が歩き出す。

三笠が悔しそうにうつむきながら歩く。

ましよが不安げについていく。

○内野家のバラック・居間・中

キミが布団から起きている。

三笠がキミを触診する。

ましよが記録を取る。

三笠「落ち着きつつありますね」

キミ「ありがとうね」

三笠とましよが器具をカバンにしまう。

キミが三笠の後ろにいる。えい子を見る。

えい子が座って化粧をする。

キミがましよを見る。

キミ「あなたは、広島の人なの？」

ましよが困った顔をする。

三笠「ましよは県外からの応援で来たんです」

えい子が三笠とえいこの後ろ姿を覗む。

えい子が立ち上がり、キミに近づく。

えい子「それじゃ、駅まで行ってきます」

キミ「あ、そうだ」

キミが三笠とましよを見る。

キミ「三笠先生にも手伝ってもらったら？」

えい子が複雑な表情になる。

三笠がえい子に振り返る。

三笠「僕にできることなら……いいよ」

えい子が複雑な顔でうなづく。

えい子「じゃ、じゃあ、お願い……」

三笠が立ち上がる。とす。

キミが三笠の裾を引つ張る。

キミ「ちよつと、聞きたいことがあるの」

三笠が怪訝な顔で座る。

キミ「えい子、先に駅に行つてなさい」

えい子が小さくうなずき、外に出る。

キミ「悪いけど、あそこの棚の中を取つて」

三笠が立ち上がり、棚の中を見る。

三笠が棚の中から一枚の紙を取り出す。

キミがうなずく。

三笠が紙を見ると、死亡通知の文書。

キミ「それ……あの子に伝えてほしいの」

三笠が怪訝な顔をする。

キミ「あなたなら聞いてくれると思うの……」

三笠がうつむきながらも、うなずく。

### ○広島駅前・全景（夕）

雨が降る。

駅前には闇市が形成され、たくさんの人でごった返す。

○広島駅前電停・外（夕）

路面電車が電停で止まり乗客が降りる。

三笠とましよが降りる。

○広島駅・外観（夕）

木造の仮設の造り。

○同・改札口・外（夕）

雨の中、傘もささずにえい子が立つ。

三笠がえい子に気づき近づく。

三笠が傘を静かにえい子にかざす。

三笠「えい子ちゃん……お母さんから聞いた」

えい子が小刻みに体を震わせる。

三笠「いつも駅で旦那さん、待ってるって」

えい子が小さくうなづく。

三笠「……残念だけど、長崎のピカで」

えい子「知ってるよ、旦那が死んでるの」

三笠がえい子の体をさする。

えい子「でも、すがりたいの！」

えい子が両手で泣きじゃくる。

えい子「私のはあの日、ここでピカにあったの」

三笠「……そうなんだ」

えい子「旦那でも、あんたでもいいから……

すがりたいの」

三笠「……家に帰ろう、ね？」

三笠が辺りを見渡す。

三笠「あれ？ ましよさん？」

三笠の目がジープに留まる。

進駐軍AとBがジープに何かを押さえ

つけようとしている。

三笠が目を凝らす。

ジープから細い足が抵抗しているのが

見える。

三笠が目を丸くする。

三笠「ましよさん！」

三笠が駆けだそうとする。

その袖をえい子が思わず引っ張る。

三笠が一瞬、躊躇する。

三笠「……ごめん、ましよは特別なんだ」

三笠が乱暴にえい子の手を払い、ジ―

プに駆け寄る。

三笠がジープに乗っている進駐軍らともみ合いになる。

進駐軍がジープを無理やり発進する。

えい子が恨めし気にジープを見送る。

野高の声「えい子ちゃん！ ごめん！」

ワイシャツ姿の野高が傘をさしてやってくる。

野高が傘をえい子にさす。

野高「遅れたよ！ すまん！」

えい子が悔し気な顔を野高に見せる。

野高が怯む。

野高「どうした？」

えい子「……あいつと女がジープに」

野高「あいつって三笠か？」

えい子「さらわれた」

野高「な！ ジープは覚えてるか？」

えい子がうなずく。

野高「よっしゃ！ 馬持ってきてやる！」

野高が駆け出す。



○紙屋町大通り・外（夕）

ジープが蛇行しながら走ってくる。

○同・ジープ車上・外（夕）

車上で三笠が運転する進駐軍Aともみあいになる。

後部座席のましよも進駐軍Bに暴れる。  
進駐軍Bがましよを押さえつけようとする。

三笠「止めろ！ 降ろせ！」

進駐軍Aが三笠を振り払おうと、顔を後ろに向けたり前に戻したりする。  
車体が大きく蛇行する。

進駐軍Aが絶叫しながらハンドルを切って正面の路面電車をよける。

MPのジープがサイレンを鳴らして追いかけてくる。

運転手がさらにスピードを上げる。

○相生橋・外観（夕）

ジープが蛇行しながらやってくる。

○ジープ車上・外（夕）

三笠が運転席に乗り込もうとする。

進駐軍Aが防戦一方で、ハンドル操作がおろそかになる。

進駐軍Aがハンドルを大きく左に切ってしまう。

進駐軍Aが絶叫する。

○相生橋・橋上・外（夕）

ジープが橋から落ちる。

周りの人達が慌てて橋から落ちた場所を見る。

○紙屋町通り・外（夕）

馬に乗った野高が駆ける。

えい子が野高の後ろに引っ付く。

野高「ん？」

野高の視線の先に人だかりが見える。

○相生橋・橋上・外（夕）

橋のたもとに野高が馬を止め、降りる。  
次いでえい子を降ろす補助をして、え  
い子が降りる。

野高とえい子が人だかりをかき分け、  
その先を見る。  
えい子が目を丸くしておののく。

○川・外（夕）

増水した川にはつぶれたジープとその  
残骸が残っている。

○相生橋・橋上・外（夕）

えい子が小刻みに震え、指を指す。  
野高が川面とえい子を交互に見る。

野高「間違いないか？」

えい子がうなづく。  
野高が川面を見ると、増水した川が勢  
いよく流れる。  
えい子が力なくその場に座り込む。

○海中（夜）

海の中に三笠が漂う。

三笠が目を開き、息苦しそうな表情で海面に出ようともがく。

○海面・外（夜）

三笠が海面にかろうじて顔を出し、辺りを見渡す。

三笠「ましよ！ ましよさん！」

見渡すと宇品港と似島が近くに見える。

三笠「ましよ！」

三笠が溺れそうになる。

三笠が海面に手を残して沈む。

とつさに宙から手が伸び、三笠を引っ張り上げる。

三笠が海面に現れ、掴んでいる手の先を見る。

三笠の視線の先に、ましよがほうきにまたがって宙に留まっている。

ほうきの柄には三笠のカバンがある。

三笠が目を丸くする。

ましよが、かろうじて三笠の体を海面から引きずり出す。

ましよが重そうな顔をする。

三笠が宇品の方を指さす。

ましよがうなずき、高度を上げ、三笠を宇品へ引っ張って飛ぶ。

○三笠病院・外観（夜）

○同・一階・診察室・中（夜）

えい子が診察室のイスに力なく座る。

えい子が机の引き出しを漁る。

えい子「ん？」

えい子が下の引き出しから手提げの金庫を見つける。

えい子「……私があげたやつ」

えい子が手提げ金庫をカバンの横に置く。

えい子「まだ使ってたんだ……」

えい子が金庫に手を伸ばそうとする。  
えい子が開けるのをためらい、一瞬手  
を引っ込める。

金庫がひとりでに音を立てて開く。

えい子が驚くも、金庫の中を覗く。

金庫の中には一冊のノートがある。

えい子が右手をためらうように動かし、  
ノートを取り出す。

えい子がノートを開く。

えい子の目が丸くなる。

### ○宇品港・上空（夜）

港や三笠病院が見える高度。

小数人が行き交うのが見える。

ましよが宙で留まる。

三笠が両手で何とかほうきにつかまる。

三笠「まずいな……人がいる」

ましよが三笠病院の屋上を指さす。

三笠「病院の屋上か、うん！」

ましよが高度を下げていく。

○三笠病院・一階・診察室・中(夜)

えい子がノートを静かに閉じる。

えい子が外を見ると、飛んでいる影を見る。

えい子が意を決した顔をする。

○同・屋上・外(夜)

ましよが高度を下げ、三笠が降りる。

ましよもほうきから降りて屋上に立つ。

三笠が興奮気味にましよを見る。

ましよが力なう笑う。

ましよが倒れ掛かる。

とつさに三笠が正面でましよを受け止める。

三笠がましよを優しく抱きしめる。

えい子の声「……助かったのね」

三笠とましよが声の方を向く。

笑顔のえい子が立つ。

えい子の手は後ろに組んでいる。

えい子が静かに三笠とましよに近づく。

えい子「……ほんと、助かってよかったね」

えい子の目は冷たい。

三笠「あ……ごめん」

えい子「でもどうやって助かったの？」

えい子が笑うが、目が冷たいまま。

三笠「えっと、それは……」

えい子「当ててあげようか？」

えい子が後ろから左手でノートを三笠に見せる。

えい子「その子が魔女だから！」

えい子がノートを掲げ、地面に落とす。

えい子がましよを見る。

ましよがノートを見て、三笠を怪訝な顔で見る。

三笠「読んだの？」

えい子「ええ！ おかげで合点がついたわ」

三笠が唇をかむ。

三笠「でも、魔女だとまだ結論出てないよ」

えい子「そんなの、もういいの！」

えい子が後ろからナイフを取り出す。



えい子「これで……魔女を刺す！」

三笠「何で？」

えい子「魔女の血とか肉食べれば！」

三笠「ピカの毒が治るとでも？」

えい子が激しくうなづく。

三笠「迷信だよ……」

三笠がえい子に近づく。

えい子がナイフを三笠に構える。

三笠「止めよう、えい子ちゃん」

ましよがゆっくりえい子に近づく。

えい子が怪訝な顔でましよを見る。

ましよが三笠をかばうように立つ。

ましよが「刺せ」と口を動かす。

三笠「止めなさい！ 二人とも！」

三笠がえい子の手元をつかむ。

えい子「あれがいいって言ってるんだ！」

三笠「止めなさい！」

えい子「うるさい！」

えい子が目を閉じる。

えい子がナイフを勢いよく、ましよに

刺す。

寸で三笠がましよをかばう。

その場が一瞬、発光する。

三笠も咄嗟に目をかばう。

その場が静まり返る。

三笠がえい子を見る。

えい子が胸から出血してうずくまる。

えい子（小声）何で！ 痛いよ！

三笠がましよを見る。

ましよが荒い息でえい子を睨み、見下す。

三笠がえい子に駆け寄る。

三笠がえい子の傷口を確認する。

三笠「すぐに処置しよう！」

三笠がえい子を抱える。

ましよは立ったまま三笠らを見る。

三笠「ましよ、処置するから手伝って」

ましよが小さくかぶりを振る。

三笠「拒むのかい？」

ましよが三笠を睨む。

三笠「……いいよ、分かった」

三笠がえい子を抱えたまま屋上を出る。

ましよが三笠を見送った後、ほうきとノートを拾う。

ましよがノートの中を見る。

○同・一階・診察室・中（夜）

三笠がえい子を抱えやってくる。

三笠が処置用のベッドにえい子を寝かす。

三笠が器具を用意して、えい子の処置に当たる。

三笠の右腕が痛みだし、苦悶の表情を浮かべる。

えい子が激しくせき込む。

ましよがノートとほうきを持ってやってくる。

ましよが三笠の背中を覗き見る。

三笠がえい子の患部をガーゼで止血しようとする。

三笠「(小声)頼む！ でないと死んでしまう！」

三笠の右腕が震えだす。

三笠の持つガーゼが定まらなくなる。

えい子「(小声)痛い、痛い……」

三笠「えい子！ お母さん残して死ぬな！」

ましよがハツとして三笠に駆け寄る。

ましよがえい子の患部に両手をかざす。

ましよの手元が発光し始める。

ましよが三笠を見る。

ましよが「手を」と口を動かす。

三笠が両手をましよの両手と重ねる。

発光が強くなり、やがて診察室が真っ

白になっていく。

○宇品港・外観 (夜)

漆黒の宇品港。

○三笠病院・外観 (夜)

○同・一階・診察室・中 (夜)

机にランタンが灯る。  
処置室のベッドにえい子が眠る。  
えい子の傷跡は一つも残っていない。  
その傍らで三笠がえい子の手を握って  
眠る。  
ましよが机に向かって左腕でノートに  
書いている。  
三笠が目を覚ます。  
三笠がえい子の患部を見る。  
三笠が傷一つないえい子の患部を優し  
くなでる。  
三笠が振り返ると、ましよがノートを  
持って立つ。  
ましよが頭を下げて左手でノートを差  
し出す。  
三笠が怪訝な顔でノートを受け取る。  
三笠がましよの上半身を見て驚く。  
ましよの右腕が無くなっている。  
ましよが三笠の持つノートを開き、指  
さす。

ノートには「力を使いすぎました」の文字。

えい子が目を覚ます。

えい子「あれ、私、死んだはず……」

ましよがえい子に近づく。

えい子が少し怯える表情。

ましよが深々と頭を下げる。

えい子が困惑する。

三笠「えい子ちゃん、場所を変えようか」

三笠がノートを掲げる。

### ○宇品通り・外（夜）

薄暗い中、宇品通りを三笠、ましよ、

えい子が歩く。

ましよの右腕は無いままだが、左手に

ほうきを持つ。

三笠の手にはカバンとランタンが握られる。

通りには路面電車の復興工事の資材やがれきの山がある。

三笠「ねえ、えい子ちゃん？」

えい子「何？」

三笠「あの日、何で広島にいたの？」

えい子「……旦那と喧嘩して、出て行ったの」

三笠「そっか……」

えい子「……誰かさんに慰めてもらおうと」

三笠「誰かさんって？」

えい子「……もう、いいです」

えい子があきれて小さくため息をつく。

それを聞いていたましよが苦笑いをし

ながらうなづく。

### ○原爆ドーム・外観（夜）

雲が少しずつ薄くなっている。

### ○同・敷地内・外（夜）

敷地内に三笠、ましよ、えい子が来る。

三人がドームを見上げる。

三笠「ここが始まりの場所」

ましよが怯えた表情をする。

三笠「あの時、ましよはこの上を飛んでいた」  
ましよが見上げたままうなずく。

三笠「僕はそれを観測器で見たんだ……」

三笠が唸って座り込む。

三笠がランタンを置く。

三笠「ごめんね……知ってるのにとぼけて」

ましよがかぶりを振って座る。

えい子もましよの横に座る。

三笠「ましよ、君のことはこのノートに？」

ましよが小さくうなずく。

ましよが口を「読んで」と動かす。

三笠がノートを開く。

三笠とえい子がノートを読む。

○(ましよの回想) 東欧・農村部の原っぱ

ましよ(20歳位)や女の子らが野原で  
かけっこをする。

別の魔女がほうきで追いかけ、一人の  
女の子の背中にタッチする。

タッチされた女の子がむくれる。



ましよやほうきの魔女が笑う。  
大規模の爆撃機軍団の音が聞こえる。  
ましよらが空を見上げる。  
ドイツの爆撃機が急降下爆撃を始める。  
ましよの近くで爆炎が上がる。  
ましよらが散り散りに逃げ出す。  
原っぱの遠くからドイツ機甲部隊が近づく。

○ (回想) 回る輪転機

英字新聞の見出し「ドイツがポーランド侵攻！」。  
別の見出し「パリ陥落！」「イギリス侵攻間近！」。

○ (回想) ニュース映像

ドイツ軍が凱旋門を行軍する。  
パリ市内は黒い旗を掲げ、市民が怯えた表情をする。  
別の映像ではドイツ空軍がロンドンを

大空襲する。

ロンドンの地下鉄には避難してきた市民がたくさんいる。

ましよ（20歳位）がほうきで飛び、逃げ惑う姿がオーバーラップする。

○元の原爆ドーム・敷地内・外（夜）

ランタンが灯る中、三笠（24）とえい子（24）がノートを見る。

ましよ（20歳位）が恐る恐る二人の表情をのぞく。

三笠が静かにノートを閉じる。

えい子「あんた……いろいろ逃げてここに来たんだね」

ましよがうなずき、原爆ドームを仰ぎ見る。

三笠「看護はその時に学んだの？」

ましよかぶりを振る。

ましよが左手を差し出す。

三笠がノートと鉛筆を渡す。

ましよが何かを書く。

ましよがノートを三笠に渡す。

三笠とえい子がノートを見る。

三笠「気づいたときには……か」

えい子「そういえば、魔女って森の奥でこう」

えい子が杖で何かを練る仕草をする。

えい子「怪しげな薬作ってる感じ」

三笠「失礼だよ」

ましよが苦笑いをする。

えい子「じゃ、じゃあ、私の質問に答えて」

ましよがえい子を見る。

えい子「やっぱり、あんたは死なないの？」

ましよが困った顔をする。

ましよが左手でノートを下さいと指示する。

三笠がノートをましよに渡す。

ましよがノートに書き加える。

ましよがノートを開いたまま三笠に渡す。

ノートには「この前の本が近いと思

ます」の文字。

続けて「私自身、分からないんです」の文字が続く。

えい子「あなたのことなの？」

ましよが三笠からノートを取って、書き加える。

ノートを開いたまま、三笠に返す。

ノートには「自分の気持ちに鈍い人もいるでしょ？」の文字。

ましよが三笠を見た後、えい子に「ね？」と笑顔で見る。

えい子が吹きだして笑う。

三笠が怪訝な顔をする。

えい子「んと、じゃあ、本の説明をして」

三笠「え、あ、うん……」

三笠が釈然としない顔をする。

三笠「魔女はいるんじゃない」

ましよとえい子が三笠を見る。

三笠「人間が勝手に作り出したんだ……」

ましよとえい子が首を傾げる。

三笠が苦笑いをする。

三笠「つまり、そうだな……」

三笠がえい子を見る。

三笠「えい子ちゃんは魔女を信じる？」

えい子「そりゃあ……」

えい子がましよを見る。

ましよが苦笑い。

えい子「それが何か？」

三笠「つまりさ……信じることで存在できる」

えい子「でも……空想の生き物でしょ？」

三笠「そしたら……ましよはどうなる？」

三笠がましよを見る。

えい子がましよに気づき苦笑いをする。

三笠「つまり、僕らが魔女はいると信じれば」

えい子がもどかしい表情で、握手で拳

を作ったり解いたりする。

えい子「そっか、いたらいいなあとって生

まれたと」

三笠「うん……人間以外に魔女という存在は

思いつかないからね」

えい子「だから、ましよさんは実態を持った」

ましよが戸惑いながらもうなずく。

えい子「あれ？ でも私、ましよさんを刺し

たけど……」

三笠「おとぎ話の教訓みたいなものだよ」

えい子「うん？」

三笠「悪いものには悪い結末……ね」

えい子「なるほど……だから私が傷を負った」

ましよがえい子に頭を下げる。

えい子が手で大丈夫と仕草する。

えい子「でも、私を傷を治してくれた……何で？」

三笠「お母さんを独りにしたくなかったから」

ましよが小さくうなずく。

えい子がましよの無い右腕を見る。

えい子「もしかして、私を治したから無くな

ったの？」

ましよが悲しげにかぶりを振る。

えい子がましよの冴えない表情に気づ

く。

えい子「ねえ、大丈夫？ 私のせい？」

えい子が三笠を見る。

えい子「それとも、ピカの毒のせいでは？」

三笠がかぶりを振る。

三笠「弱っている理由も……察しはついてる」

えい子「誰も魔女を信じなくなつたから？」

三笠が小さくかぶりを振る。

三笠「それもあるかもしれない……けど」

えい子「じゃあ何？」

三笠「魔女の奇跡を超えたんだよ、人間は」

三笠が原爆ドームを仰ぎ見る。

三笠「人間は太陽を作つちまつたんだ！」

ましよとえい子も原爆ドームを仰ぎ見る。

爆音とともに白き閃光が走るイメージ。

上空で強い風の切る音がする。

三笠「魔女も神様も、太陽は作れない！」

三笠がうつむき泣き出す。

三笠「ましよは声で抗うこともできない！」

三笠が体を震わせなく。

三笠「人間の手で消えるんだ……ましよは」

ましよとえい子が立ち上がる。

ましよとえい子が三笠を見る。

えい子「でも、彼女はまだ消えてない！」

三笠が顔を上げ、ましよを見る。

えい子「彼女はあんたを好いてるよ！」

ましよが三笠に近づく。

えい子「彼女の意思だよ！ 勝手に消すな！」

ましよが笑顔を三笠に向ける。

三笠が立ち上がる。

三笠がましよの体を抱きしめる。

ごろつきの声「いいねえ！」

三笠らが声の方を向く。

ごろつき二人が嫌な笑みと共に来る。

ごろつき二人がましよとえい子を見  
て、口笛を吹く。

三笠がランタンを慌てて取って、ごろ  
つき二人の前に立つ。

ましよとえい子が三笠の背後に隠れる。

ごろつき二人がニヤニヤしながら三笠  
に近づく。



ごろつきA 「あの女だ！」

ごろつきB 「アメ公に売れば銭になる！」

三笠 「……失せろ！」

ごろつき二人が笑いながら三笠にパンチをくらわせる。

三笠がその場に伸びる。

ごろつき二人がましよとえい子に襲いかかる。

ましよがとつさに地面に落ちているほうきを左手に取る。

ましよが迫りくるごろつきAを叩く。

ごろつきAの頭にほうきが当たり、ひるむ。

三笠がよろけながら立ち上がり、えい子に襲うごろつきBに体当たりをする。

ごろつきBが倒れ、えい子が逃げる。

ごろつきBが怒りの形相で三笠を仰向けにして顔を殴打する。

えい子 「止めて！」

ましよがほうきでごろつきBをデタラ

メに叩く。

ごろつきBがひるんで三笠から離れる。

三笠が体を起こす。

えい子が三笠に駆け寄る。

三笠「いてて！」

三笠がましよを見る。

ましよがほうきにまたがって目を瞑る。

ましよが集中している。

ましよの体とほうきが発光し始める。

三笠やごろつきらがあつけにとられる。

ましよが目を開けて三笠とえい子を見る。

ましよの右腕が発光と共に復活する。

ましよが「乗れ」と口を動かす。

三笠「乗れって！」

えい子「ええ！」

ましよが口で「早く」と動かす。

三笠が立ち上がる。

えい子が三笠を支えつつ、ましよに近づく。

えい子がランタンとカバンを手際よく  
拾い上げる。

ましよのほうきに三笠とえい子がまた  
ぐ。

三笠「飛ぶ気？」

えい子「あんた？」

ましよが自信満々な表情でうなずく。

ましよがほうきを力強く握る。

ほうきがゆっくり上昇を始める。

ましよが両足を空で強く蹴る。

ほうきがましよ、三笠、えい子に乗せ  
て飛び立つ。

ごろつき二人があっけにとられ、ひっ  
くり返る。

○広島上空・外（朝）

ほうきに乗ったましよ、三笠、えい子  
が笑いあう。

えい子「あはは！　ごろつきのあの顔！」

ましよが振り返って苦笑いをする。

三笠、えい子が夜明けの街を見る。

えい子「見て！ みんな頑張ってるよ！」

三笠「うん……懸命に生きてる」

○広島市内のスケッチ（朝）

夜が明け、人々が行き交い始める。

市内の大通りには路面電車やジープ、馬車が走る。

広島駅には乗客で混み始める。

それらの上をほうきに乗ったましよ、

三笠、えい子が飛ぶ。

○広島上空・外（朝）

ほうきに乗って飛ぶましよ、三笠、えい子。

三笠「さつきはごめん、いい世界にしなきゃ！」

えい子「当然よ！」

ましよが泣き笑いの顔でうなずく。

ましよが高度を下げていく。

○原爆スラム街・上空（朝）

ましよらに乗せたほうきがスラム街の  
一角に降りていく。

○同・裏路地・外（朝）

ましよが裏路地にほうきを降ろす。

三笠とえい子がほうきから降りる。

三笠が辺りをうかがう。

三笠「見られてないかな？」

えい子「この時間はまだ寝てるよ」

ましよがふらつく体をほうきで支える。

三笠「おっと」

三笠がましよを支える。

えい子がそれを見る。

えい子「うちで休んでいきなよ」

ましよが少し笑ってうなづく。

○内野家のバラック・玄関・外（朝）

えい子に続いて三笠、ましよがやって  
くる。

えい子「ちよつと待っててね」

えい子が中に入る。

えい子の声「お母さん？」

三笠とましよが怪訝な顔で中を見る。

えい子の声「お母さん！」

三笠とましよが慌てて中に入る。

○同・居間・中（朝）

粗悪な白熱球が中を灯す。

布団にはキミ（43）が横になる。

キミの口や床に真っ黒な液体が大量に  
付着する。

えい子がキミのほほを軽く叩く。

三笠とましよもキミの傍らに駆け寄る。

三笠が手でキミの脈拍や口、目を確認  
する。

ましよがカバンから聴診器を取り出す。

三笠がましよから聴診器を受け取り、

キミの心音を確認する。

えい子もキミの胸に耳を当てる。

えい子が悲壮な顔で三笠を見る。

三笠が静かに聴診器を外す。

三笠「……だめだ」

えい子が激しく泣きじゃくる。

三笠が腕時計を確認した後、目頭を押さえる。

ましよは居間の隅でしゃがんで顔を見せないようにしている。

ましよの体が小刻みに震える。

○洋上の船・外観（夕）

天気は晴れ。

ポンポンとエンジン音を立てて船が進む。

○同・船の甲板・外（夕）

甲板に粗末な作りの棺桶。

傍らにはえい子がびったりと寄り添う。少し離れたところから三笠とましよが見る。

三笠が船の進む先を見る。

似島が見える。

似島から白い煙が一本のぼっていく。

○似島・焼き場・外（夕）

遺体の焼き場だが、野焼きで何も整理されてない。

炎の勢いがある焼き場。

そこへ三笠とえい子が棺桶を持ってやってくる。

ぼろの国民服を着た人が不機嫌そうに手で「くべろ」と指示する。

三笠とえい子が棺桶を焼き場に静かに置く。

棺桶が炎に包まれる。

三笠とえい子が目を閉じ合掌する。

えい子がむせび泣く。

ましよが少し離れた木に寄りかかって小さく座り、半ば放心の面持ちで三笠らを見る。



○原爆スラム・俯瞰（夜）

○内野家のバラック・外観（夜）

家からほんの少しの灯が漏れる。

○同・居間・中（夜）

粗末な白熱球が中を照らす。

机の上に粗末なつくりの箱とキミの小さな写真が飾られる。

その机の前にえい子が呆然と座る。

三笠の声「えい子ちゃん……」

えい子が力なく振り返る。

三笠とましよが入ってくる。

三笠の手には新聞紙で包んだものを持っている。

三笠「何か食べないと……」

三笠が包みをほどく。

中から一銭洋食が出てくる。

三笠がえい子に差し出す。

えい子「……ありがとう」

えい子がそれを押し返す。

えい子「でも、いいの……」

えい子が再びキミの遺影を見る。

えい子「これからも、怯えて死ぬんだらうね」

三笠「そんなの……生き延びたんだから」

えい子「変な慰めはやめて……」

えい子が箱をなでる。

えい子「あんな生き地獄にさらされて……」

えい子が箱を抱きしめる。

えい子「やっと希望ができたとたん……」

えい子が泣き出す。

えい子「(大声) あんまりだよ!」

三笠が無言で一銭洋食を新聞紙に包んで静かに床に置く。

三笠がましよを見ると、床にへたり込んでいる。

三笠が不安げにましよを見る。

○相生橋・外観(夜)

○同・橋上・外（夜）

三笠がましよを背負って歩く。

三笠が一瞬、ましよに振り返る。

ましよの顔色はさえない。

三笠が前を見て、意を決した顔になる。

○三笠病院・外観（夜）

○同・二階・居間・中（夜）

布団の中でましよが眠る。

三笠が布のカバンに食べ物や水筒をつめていく。

その音を聞いてましよが目を覚ます。

ましよが体を起こす。

三笠が気づき、ましよに振り返る。

三笠「……これに着替えて」

三笠が床に置いていた素っ気ない黒のドレスを差し出す。

ドレスの裾には「三笠ましよ」と縫い付けられている。

三笠「着替えたら下においで……」

三笠が部屋を出て行く。

ましよが怪訝な顔で、そのドレスを手に取る。

三笠の声「早くしなさい……」

ましよがうなずき、着替えを始める。

○同・玄関・外（夜）

三笠が布カバンを持って立つ。

玄関の壁にほうきが立てかけてある。

足音が建物の中から聞こえる。

ましよが怪訝な顔で外に出てくる。

三笠「おいで……」

ましよが三笠の前に立つ。

三笠がましよを眺め見る。

三笠「うん、似合ってる……大丈夫だね」

三笠が布カバンをましよに差し出す。

三笠「ん」

三笠がさらにましよに布カバンを押し付ける。

ましよがおずおずとそれを受け取る。

三笠がほうきを手に取り、ましよに差し出す。

ましよが疑問の表情を見せる。

三笠「……出て行くんだ」

ましよが驚いた顔をする。

三笠「(大声) 出ていけ！」

ましよが悲し気な表情でかぶりを振る。

三笠「君はここにいちやいけない！」

ましよが激しくかぶりを振り、三笠に抱きつく。

三笠も悲しげな顔をする。

三笠がポケットからメスを取り出す。

三笠がましよののどにメスを差し込む。

ましよが苦悶の表情で三笠から離れる。

ましよがのどに手を当て苦痛の表情になる。

三笠がほうきをましよの前に投げおく。

三笠「僕はこれから原爆症と戦う！」

ましよが泣き顔でほうきを拾う。

ましよが再び三笠を見る。

三笠「もう、君のことは考えられない！」

三笠が再びメスをましよに向ける。

三笠がメスを持つ手で「行け！」と荒々しく仕草する。

三笠「君がもし、ある日いなくなったら」

ましよが腕で涙をぬぐう。

三笠「僕は耐えられない！」

ましよが三笠を見る。

三笠「だから君が消える前に！」

ましよがほうきにまたがる。

ましよが目を閉じ、ほうきを強く握る。

ましよが激しくかぶりを振る。

三笠がメスを構えてましよに近づく。

三笠がメスをましよに振りかぶる。

三笠「飛べ！」

三笠がメスを振り下ろすと同時に、ま

しよが勢いよく空へ飛ぶ。

ましよが高度を上げていく。

三笠がそれを見上げる。

ましよの姿が闇に溶け込んでいく。  
夜が少しずつ明けていく。  
三笠が空を見上げる。  
三笠が泣き笑いの表情になる。

○広島市内・俯瞰

テロップ「十年後・夏」  
広島の内が整備されている。

○同・市内のスケッチ・外

道路は整備され、路面電車も多く走る。  
広島総合球場でカープが公式戦をする。  
球場には多くのファンの声援が飛ぶ。  
広島駅前には店が多く並び、人々が行き  
交う。

○三笠病院・外観

白いペンキで真新しく改装された建物。  
野高の声「いやあ！ すごかったぞ！」

○同・二階・居間の本棚・中

本棚には「放射線治療の手引き」や「広島・長崎原爆調査資料」、「甲状腺疾患の症例と治療」などの本が並ぶ。

三笠の声「何がです？」

○同・一階・診察室・中

三笠（34）が野高（37）の血圧を測る。

野高「ゴジラだよ！ ゴジラ！」

三笠は血圧計から目を離さない。

三笠「そうなんですか？」

野高「もう大スペクタクル！」

三笠が苦笑いをする。

三笠「落ち着いてください」

三笠が血圧計のゴムを緩める。

三笠「再検査しますよ」

野高「え！ どこが悪いんか？」

野高が自身の少し太った腹を見る。

野高「妻の料理、食いすぎたかな……」



三笠が苦笑いをしてかぶりを振る。

三笠「興奮しすぎです。ゴジラで高血圧」

野高がバツの悪い顔で笑う。

三笠が血圧計のゴムを握る。

○同・玄関・中

野高が靴を履く。

三笠がやってくる。

野高「やあ、助かったよ！」

三笠「お大事に、奥さんにもよろしくと」

えい子（34）が入ってくる。

えい子「ただいまー」

男性「お！こりや三笠の貴婦人！」

えい子「いやだねえ！調子がいい！」

えい子が笑いながら野高の肩を叩く。

野高が手を振って出て行く。

えい子がドアを閉め静かに施錠する。

三笠が不安げな顔でえい子の表情をう

かがい見る。

えい子「どうだった……検査？」

えい子がうつむきながら小さくかぶりを振る。

えい子「妊娠していないって……」

三笠「そっか……」

三笠が悲しげな顔をする。

えい子が笑顔で振り返る。

えい子「ねえ！ デートしよ！」

三笠が一瞬、虚を突かれた顔になる。

三笠が笑顔になり、うなづく。

### ○繁華街の映画館・外観

「ゴジラ」の大きな看板が掲げられる。

### ○映画「ゴジラ」のシーン

ゴジラが東京に上陸し、火を吐き破壊の限りを尽くす。

別のシーン、海中で芹沢博士が秘密兵器を発動する。

海面に現れたゴジラが苦しみの咆哮をあげて海中に没す。

○映画館・劇場・中（夕）

三笠が悲しげな顔をする。

えい子が静かに泣く。

○宇品港の通り・外（夕）

港に沿って三笠とえい子が並んで歩く。

えい子「確かにすごかったね……」

三笠が小さくかぶりを振る。

三笠「この現実には比べたら……」

えい子「その割には」

えい子が三笠の手を見る。

三笠の手にはくしゃくしゃになったゴ

ジラのパンフレットが握られる。

三笠がむくれてそっぽを向く。

えい子「ごめん……」

三笠がえい子に振り戻る。

三笠「でも、少し救われたかも……」

えい子「何で？」

三笠「ゴジラが人間に核兵器の恐怖を示した」

三笠が再びえい子に視線を戻す。

三笠「空想がまだ訴える力を持っている」

三笠が笑顔になる。

えい子「……よかった」

三笠とえい子が並んで湾を見る。

えい子「ちよつとふさぎ込みだったから」

三笠「大人になったのかな？ 少しは」

えい子「どうして？」

三笠「お化けとか言わなくなったから」

三笠とえい子が笑いあう。

えい子「ところで、一つ聞いてもいい？」

三笠が手で「どうぞ」と促す。

えい子「ましよさんをABCCに渡さなかった

のはなぜ？」

三笠「特別だったから……」

えい子「……そうでした」

三笠「でも、もつと大事な理由がある」

えい子「何？」

三笠「ましよが原爆症に有効と分かれば……」

えい子「いいじゃないの？ 治るんだし？」

三笠「そしたら原爆はただの兵器になる」

えい子「そっか……そしたら米ソの思うつぼ」

三笠「でも、その前にましよは消えるよ」

えい子「そう……だから追い出した。遠くへ」

三笠「ちゃんと別れたかったから……」

三笠がうつむきながらうなづく。

三笠「これは人間の過ちの問題だから……」

えい子「……あんた、ちよつと嘘ついてない？」

三笠がえい子を怪訝な顔で見る。

えい子「あたしたち、被爆者じゃない」

三笠が小さくうなづく。

えい子「もし、あんたの身に何かあったら」

三笠がうつむく。

えい子「あの子を残して死んだらと思うと……」

……

三笠「……良く分かったね」

えい子「私があの子の立場なら、胸が張り裂

けるよ……」

えい子がため息をつく。

えい子「魔女をも奪っていくか、あのピカは」

三笠が港湾施設を凝視する。

三笠が急に走り出す。

えい子「ちよっ！ ちよっと！」

えい子が後を追う。

○宇品港・港湾施設・外（夕）

港湾には一隻の船舶が停泊する。

港湾には数人の船員らが囲んでいる。

三笠の声「すいません！」

船員らが三笠に振り向く。

船員A「おお！ 三笠先生！」

三笠が船員らに近づく。

船員B「これ……名前が」

船員が地面に広げている黒のドレスと  
ほうきが見える。

ドレスはボロボロだが、「三笠まじよ」  
の刺繍部分は残っている。

そのドレスが真っ黒に変色したほうき  
にへばりついて離れない。

三笠がそれを見て目を大きくする。

えい子が三笠に追いつく。

えい子「あんた？」

三笠が力なくしゃがみこみ、ドレスと  
ほうきを手に取る。

三笠「……これはどこで？」

船員B「太平洋のど真ん中ですよ」

三笠「それは……あの実験場辺りで？」

船員らが顔を見合わせる。

船員A「え、そうですね……」

船員B「近くはないですが、恐らく海流に乗  
った物かと」

三笠「そうですか……」

三笠がドレスとほうきを抱きしめ、む  
せび泣く。

えい子「あんた……」

えい子が三笠の隣にしゃがみ、背中を  
優しくさする。

○三笠病院・外観（夜）

○同・屋上・外（夜）

三笠が冴えない顔で寝そべっている。

三笠の視線に星空が見える。

えい子の声「執念だね、あの子は」

えい子がやってくる。

三笠は表情を変えず空を見る。

えい子「全く、大好きだったんだね」

三笠「そうじゃないさ」

えい子が三笠の横に寝そべる。

三笠「伝えたいんだよ……ホントにいたって」

えい子「めんどくさい子ですこと」

三笠が苦笑いをする。

三笠「ドレスとほうきは、僕が墓場まで持つ

ていこう」

えい子「残念！ そうはさせませんよ！」

三笠「……なんで？」

えい子「子供！ がんばろうよ……ね」

三笠が苦笑い。

三笠「そうだね……子供に伝えないとね」

三笠が深呼吸をする。



○三笠の視線・外（夜）

星空の夜。

三笠の声「僕たちに子供ができるのか……」

三笠が一回、まばたきをする。

三笠の声「子供ができた時、世界は……」

三笠が再び、まばたきをする。

三笠の声「魔女やお化けがいるだろうか？」

三笠がまばたきをして、視界がにじむ。

三笠の声「それとも、見渡す限りの無か？」

三笠が目を閉じる。

三笠の声「でも頑張ってみよう……だって」

○三笠病院・二階・居間・中（夜）

居間の布団にましよのドレスとほうきが並ぶ。

三笠の声「ましよはそこにいたのだから……」

〈了〉

（二百字詰め原稿用紙換算・230枚）